



CASIO QV-10A (1996)

by awane-photo.com

1990年代後半，デジタルカメラの普及がはじまった！

1995年に発売されたCASIO QV-10は、デジタルカメラというものを一般市場に定着させた、まさにエポックメイキングな製品であった。その撮像素子は25万画素で、ピント調整はできず(固定焦点)、フラッシュも内蔵されていない。写真を撮る道具としてはやや物足りないものであったが、撮影した画像を内蔵した液晶モニターですぐに見られることや、パソコンに取りこんで利用するなど、あたらしい価値観を定着させた功績は大きい。基本的なスタイルを変えずに、モデルチェンジを繰り返しながら低価格化をすすめていった。

機種	発売時期	価格
QV-10	1995年3月	65,000円
QV-10A	1996年3月	49,800円
QV-11	1997年2月	38,000円

▲表1 CASIO QV-10シリーズの価格



▲CASIO QV-10A

シャッターリリースボタンが、カメラを構えたときに右手の第二指の位置にある点は、従来のカメラと共通している。しかし、レンズが向かって左上の端に寄っているのは、フィルムで撮るカメラでは見られない特徴である。

ここで紹介するCASIO QV-10Aは1996年に発売されたものである。CASIO QV-10のマイナーチェンジモデルにあたる。機能はとくにかかわらず、外見的にはボディーカラーが変更された程度である。内部の画像処理ソフトウェアが改善されたというが、撮像素子が25万画素でピント調整ができない固定焦点である以上、劇的に画質が向上したという印象にはつながらない。

画質の面ではまったく物足りない仕様であった一方で、レンズ部分が回転できるようになっているなど、デジタルカメラならではの機構も盛りこまれていた。また、撮った画像をすぐに内蔵された液晶モニターで表示できることは、デジタルカメラの普及に大きく影響したと考えられる。



▲レンズ部の回転機構

レンズは180°以上回転できるようになっているので、液晶モニターを上向きにしてウエストレベルファインダーのように使ったり、いわゆる自撮りに使ったりすることができる。

デジタルカメラならではの特征としては、撮影した画像をパソコンに取りこめるという機能も用意されている。しかし、メモリーカードには対応しておらず、撮影した画像は内蔵メモリーにのみ記録される。USBやIEEE1394端子が登場する以前のことであり、パソコンとはシリアル端子(RS-232C)で接続する。撮影した画像をパソコンに取りこむには、専用の接続ケーブルとソフトウェアが必要であった。その他、専用のフロッピーディスクドライブCASIO FD-10が用意されていた。

保存される画像ファイルはJPEGなどの汎用的な形式ではなく、拡張子.comのついた独自の形式のファイルになっている。これをJPEG形式に変換するためには専用のソフトウェアが必要であり、たとえばCAMomile32というフリーソフトウェアなどが利用できる。

CASIO QV-10以来の、液晶モニタをファインダーとして使いレンズが自由に回転するというのは、デジタルカメラならではのスタイルだった。後にNikon Coolpix 2500なども、そのようなしくみを取り入れている。シリーズ後継機となる光学ファインダーを設けたCASIO QV-70は、デジタルカメラならではのスタイルを模索するというスタンスを離れ、従来のフィルムカメラのスタイルと使い勝手に近づくものであった。結局、多くのデジタルカメラが、その方向に進むことになるが、最終的には一眼レフカメラを除いて、光学ファインダーを使わずに液晶モニタを利用する形式に収れんしている。



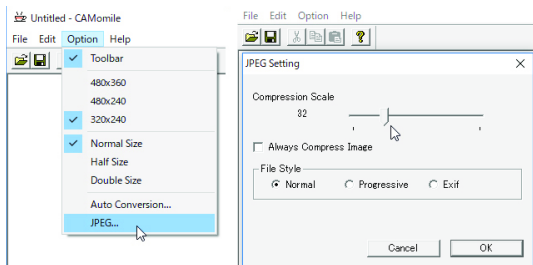
▲CASIO FD-10

CASIO QV-10シリーズのカメラと接続することで、カメラ本体に記録した画像データをフロッピーディスクに転送して、保存ができる。



▲CASIO QV-10Aによる撮影例

320ピクセル×240ピクセルでは、このような小さなカット写真用としても、画素数が足りない。レンズや露出制御、画像処理の性能も発展途上で、使いこなすのは容易ではない。



▲CAMomile32の画面例

CASIO QV-10シリーズの.cam形式ファイルを.jpg形式に変換できる。